

“SETONAIKAI”(Inland Sea) society
in the last Edo Period
:based on the influence of the CHOSHUU wars

Tatsuya TAMAI

Information circulation in Inland Sea of Seto was interruption once in a “KANSEI” period, but after that, the convalescent aspect was shown according to the former studys. But the aspect of Bakumatsu period isn’t clear.

There was delay of information by Ryukyu mission in “KAEI” period, but such as this reason couldn’t see stereotyping in a passage area, there was difficulty of the correspondence in the root. Delay of information wasn’t seen about usual business of anything but that. But information was blocked by “Choshu-han” off perfectly by passing through “CHOSHU” wars. Therefore public grapevine collapsed perfectly.

Keyword:
the Seto Inland Sea, History of Transport and
Communications, Regional history the late Edo period

ている。また「御仕構」自体においても八原氏自ら船の用意をし、また近隣に呼びかけ水主の手配の指揮を取っている。その八原氏は伊予松山藩士で、宝永元(一七〇四)年ごろの「懷中便覧 松山役録」(伊予史談会一九八九)には「式人扶持八石」とあり、文化五(一八〇八)年ごろに成立した「松山俸禄」(伊予史談会一九八九)では「式人扶持十式石 郡奉行支配末寄合大小姓格 八原佐之右衛門」、「式人扶持七石 同御歩行格 八原隼太」と書かれている。また、津和地島は伊予松山藩の郡奉行によつて管理されていた西村(一九八六)。ただし郡奉行は常時、設置されていたわけではなく、津和地島は嶋方代官支配下におかれることもあった(石丸一九九二)。また、三津の船奉行から船などが提供されている様子がうかがえ、伊予松山藩から船奉行を通して物資などが支給されていることがわかる(玉井二〇二一)。

三 幕末期の公儀浦触

既述のように公儀浦触という公的情報が寛政期には停滞したものの、その後、復旧し、近世後期には情報はスムーズに流れるとされている。その大きな歴史的展開は次の史料を見ても、概ね間違っていないと考えることができる。

一 蒲州より飛船到来之處、上筋より順達到来之旨、左之通申来ル

以飛札致啓上候、春暖相催申候處、彌御堅固可被成御勤役珍重奉存候、然者長崎江御下向之御而役之儀、別紙之通上筋より順達致到来候二付、則写宥通致進達候、御落手被下向、下筋へモ宜敷様御通達可被下候、右為可得御意如斯御座候、恐惶謹言、

三月六日 西村衛守

八原團藏様

以切紙致啓上候、余寒難退御座候處、彌御堅固可被成御勤珍重奉存候、然者長崎江御下向之御勘定役松野三平治様、御普請役辻嘉右衛門様、当月十三日江戸表御出立、御道中御滞無之候へ者、来ル廿九日頃御到着

可被成候由承り及候間、為御知得御意候、尚御着坂之上、海陸之訳知次第、早々為御知可申上候、右為可得御意如此二御座候、已上、

二月十九日 小森亭

佐治又八郎宛

大野六郎兵衛宛

尚々此段下筋へモ御通達可被下候、

(中略)

一 右順達便ヲ以小倉行御用状箱届ケ方、上ノ関迄頼遣ス

これは嘉永二(一八四九)年の史料であるが、「上筋」(大坂方面)から流れてきた長崎上使の通航を知らせる「順達」(公儀浦触)が蒲刈より津和地へ伝えられ、その後、「下筋」(九州方面)へと伝達されるというのは、これ以前より普遍に行われてきた情報流通と言える。特に、蒲刈の在番からの書状に、そこより東の区域でやり取りされた書状の写しを同封することで情報を二元化し、伝言ゲーム的なやり取りを避けるのも、津和地を行き来する情報としては極めて一般的なやり取りである。ただ二つだけ、特異であるのは「小倉行御用状箱」の存在である。同年三月二六日の史料を見ると「御目附所方豊前小倉河内屋六左衛門江被遣候油紙包御状箱尅本文順達便二而、例之通上ノ関江届ケ方、別二書面ヲ以頼遣候處、早便之節差送可申旨、請取書差越申候二付、入御覧申候」²と書かれているように「豊前小倉河内屋六左衛門」により、運ばれている。この点は既に琉球使節の通航時にも同様の情報流通が見られたことは指摘されているが(玉井二〇〇六・二〇〇八)、幕末期にも河内屋によつて情報が運ばれたことが見て取れる。しかし、全てが河内屋によるものではなく、多くの情報は通常通りの「順達」ルートにて運ばれている。しかし、このように全てにおいて公儀浦触が正常に機能し、遅滞なく進んでいくわけではなかった。

一 筆啓上仕候、然者琉球人御様子下筋より者未タ如何義も不申越候得共、今日小倉日切船汐繫之處、薩州御飛脚乗組居候由二付、琉球人御

様子相尋させ候処、御家老川上筑後殿御引纏、今廿一日薩州鹿兒島御
出立之由、別紙之通御飛脚を書付取付させ申候、即直書入御披見申
候、尤当年者御急キ之趣二而来月廿日頃大坂御着船之御日程之由、乍
併薩州御領内二而三ヶ所程も御馳走場所所有之、右一固^⑧所之内二而二兩
日或者五六日茂琉球人心任せに逗留之事も有之、其上天氣之模様二
より海上之儀遅遠難計二付、是等之処者書付二相成不申候間噂有之
候段、承合せ申候、右聞合之趣二而者差掛り候二付、先達而御伺申上置
候津和地表御通船之節御仕構向、猶御茶屋并長屋御取繕、御修理共、
其々早々二御下知被成下候様仕度奉存候、下筋を順達到来次第可申上
候得共、下筋之儀者順達次場数ヶ所二而、兎角遅滞二相成候方二付、火
急之御左右可申来程も難計奉存候間、前段之通聞合申候二付、不取敢
御註進申上候、

一下筋を順達者無御座候得共、二固^⑧様之儀者相互之儀、殊二先達而上
筋を頼越候二付、飛船を以蒲刈江及順達申候、猶沖家室をも同様之訳
二付、聞合を旁、油宇村を村継を以可申遣候奉存候、此段聞召置可被
下候、

八月廿二日 八原團藏
奥平三左衛門

これは嘉永三(一八五〇)年に八原から伊予松山藩の島方代官である奥平
に出された書状³である(傍線部は筆者による)。史料内で様々な伝手を利用
して、情報を得ようとしているのは、いつ来るのか、どこを通るのか、という
時間・地理的情報が入ってこないという点による。これは琉球使節通航だけ
ではなく、朝鮮通信使や長崎上使、他藩や幕府の役人などにおいても同様で
あり、瀬戸内海を流通する情報として、特別な通航に対応する際にはよく
見られる事例として一般化できる。しかし、ここにおいて「下筋之儀者順達次
場数ヶ所二而、兎角遅滞二相成候」と書かれているように、「順達」を継ぎ送
りにより繋いでいく場所にて遅滞していることにより、情報が届かないことを
認識している。これに対して「二固^⑧様之儀者相互之儀」とあるように「力所で

の問題は「相互」の問題として、津和地島より主体的に情報収集を行ってい
くことが明言されている。以上のように通常であれば「順達」が滞りなく、流
通していることがわかるが、琉球使節など特別な事例に対応すべき時は、幕
末期においても停滞現象が発生することがわかる。逆に言えば、通航の日時・
ルートが判然としないにも関わらず、特別な事例であるがゆえに島として対
応しなければならず、そのために遅滞は起こりうるものであると考えること
ができる。だからこそ「相互之儀」という発想に繋がる。

四 噂話から不通の事態へ

既述のように公儀浦触を中心とした公的な情報流通は一部の停滞は見せ
るものの、概ね通常通りの流れを見せていた。しかしながら、流れてくる情報
は常に公的なものとは限らない。

一奥居嶋を今夕飛船到来之处、急御用状、左之通到来
以手紙致啓上候、然者此節長崎表江異国船五拾艘計相見、内壹艘ハ
地方江付候趣二而、同国重立候者ハ他行留二相成候哉之旨、尚又右件
二付而ハ長州様御領於三田尻ハ御軍船御手配等も有之候哉二相聞候
旨、尤耽卜取定候様子ハ無之二付書面二而被仰達候程二モ至り不申候
得共、追々相聞候儀二付御口達有之候趣二而、御子息熊之進殿を役頭
江迄御申達二相成候趣、右者実説二候哉、妄説二候哉、三田尻江飛船差
遣、先方御模様并風説等承り取、早々御申達二相成候様、御懸合可申
旨、御代官被申聞候間、其段御承知被下、早々御手当二而御聞取御申達
二相成候様致度候、右為可得御意如此二御座候、以上、

四月十九日 西村弥四郎
八原團藏

これは嘉永二年の史料であるが⁴、奥居島より津和地島の八原に対して、
「長崎に異国船五〇艘を見た」、「それに対して長州領の三田尻にて軍船を

用意している」という一点が「実説」であるのか「妄説」であるのかという問い合わせを行っている。そのため、同年四月二日に長州藩領である由宇村に「異国船数艘相見内沓艘ハ地方江付候趣、右二付貴領於三田尻者御軍船御手配等モ有之候様風説及承候」と問い合わせ、「実説二御座候ハ、三田尻御模様委被仰越被下度、尚風説共御聞及之儀モ御座候ハ、同様被仰聞被下候様奉頼候」と依頼している。これに対して、「当春以来異国船追々令到来候段、先達而沙汰被仰付候処、此度肥前国長崎表江北アメリカ州之船沓艘令到来候段、彼地方注進有之候二付、様子次第追々沙汰被仰付候儀モ可有之候」、「当月十五日三田尻方用状到来之内、異船之趣、左三先達而注進仕候異船渡来之趣二付而ハ、萩沖三嶋江物頭沓人、御目附沓人、惣人数七八拾人御仕向相成候、長崎奉行江御聴廻旁トシテ井上七郎三郎殿間役衆沓人過ル七八日之頃、御仕向被成候趣二御座候」という回答が届き、長崎に來たのはアメリカ船であり、それに関して三嶋へ藩士を差し向け、同様に長崎奉行に調査として人間を派遣しているという内容であった。このように幕末期には異国船打払令などの影響により、多くの異国船に対する警戒とともに、それに付随する風説がめぐり、それを解消すべく確認作業が行われていた。しかし、嘉永段階では、このように情報の真偽確認が比較的スムーズに行われていたが、次第にこれすら滞ることになる。

一筆啓上仕候、然者先達而御差図被仰聞候御両役様御下向順達之儀、前々之通沖家室江順達仕候処、同所在番在萩留守中二而、同所久賀御代官所江持参致、夫々山口表江伺二相成候趣、右二付返書之儀者、彼是隙取可申候間、一先飛船帰帆可致旨、沖家室留守詰之モノ申事二而、右飛船罷帰申候、其後又々飛船ヲ以返書促催致候処、未ダ山口表伺済二相成不申候間、右伺済次第当方々相送可申ト申事二付、其儘二而飛船罷帰申候、然ル処、右返書無之、先方請伝之有無相分申候二付、猶又飛船ヲ以今二応催促致見可申哉、御伺申上候、元来山口江者里数有之、其上先方二而モ色々御評議二相成可申ト奉存候間、全夫故隙取可申儀ト愚案仕候、且又新役付届之儀モ先達順達致候節、一緒二取計可申旨、

御沙汰之処、離島之儀音物品相整不申、就而者上筋方順達到来致候而方彼は日合相重り余り延引二相成候間、順達而已二而、付届之儀者、追而取計可申ト存、其節者相見合申候節モ、順達而已二而、追而吹聴致候、前例モ御座候二付、御伺不申上、右様取計申候、右二付下筋差遣シ候飛船、追而御達可申上ト奉存候、先者前文之次第二而、先方返答振相分不申候得共取計後、日数相立候二付、右御伺旁、一先御達為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

四月 八原高次郎

増田代八様

これは慶応三（一八六七）年に八原から島方代官の増田に出された書状である。「両役（長崎上使）の下向に関する「順達」を沖家室へこれまで通り送っている。しかし、沖家室在番が不在であったため、久賀代官まで持参し、そこから山口まで送り、状況をうかがうことになった。しかし、その後、返書の催促を行ったが、山口への伺い自体を行っておらず、山口側が受け取ったかどうかすら分らない状況である。また、後半では別の書状に詳細が書かれているが、隣領の在番交替により順達にて連絡するとともに、音物も送るべきところ、離島にて品物の準備が整わないために音物贈答を延引している。この長崎上使の件に関して沖家室に再度問い合わせたところ、「去夏炮闢以來、他邦江音物杯者勿論、書状タリ共取遣堅禁之儀二付、未タ手元々モ付届不申」との返事があり、「去夏炮闢」つまり第二次長州戦争以来、他国との書状のやり取りが途絶している点が知らされている。これを踏まえて、八原は島方代官である増田に対し、同年五月九日の書状にて「何国江モ同様出入不致候間、少モ懸念無之候致度旨、上乘江申聞候趣、則音物取帰リ申候」と沖家室からの連絡を伝え、「順達返書之儀者、今以上山口表伺済無之候否之儀相分次第不取敢態飛船ヲ以、返書差越可申様申出候趣二御座候、且又大嶋御代官江音物之儀モ沖家室江相頼同所ヨリ先方江相届呉候儀、常例二付此度モ前格之通、相頼申候処、大嶋郡迎モ当表同様二付、先音物者御取帰可然」と順達だけではなく、音物も大嶋代官経由で送ろうとしたところ

る先方も津和地同様に長州藩領とのやり取りが途絶している点が確認されている。さらには「於上関モ同様之儀ニ有之候間、是又可然伝達可致旨、沖家室出役ヨリ当方使之者江申聞候」と上関も同様であることがわかる。⁹しかし、同年七月二〇日には蒲刈在番の高槻から次のような書状が来ている⁷。

蒲州ヨリ狀船到来之处、左之通申来ル、猶上乘ヨリ幾三郎伝言ニ而、強而下筋二応及催促呉候様申出候二付、左之通返書差遣ス、

以使札得御意、残暑之砌ニ御座候得共、彌御堅固可被成御勤珍重奉存候、然者当春御両役御下リ之儀ニ付、御通達申候処、先日御細書ヲ以被仰聞、一応承知イタシ篤ト考合致候得共、沖家室受伝有無何等返書無之候而者、上筋江通達モ難出来、其節沖家室返書御写シ越可被成候書余者、使之者ヨリ御聞取可被下候、此段御掛合申候間、宜御取計可被成候、右為可得御意、如此ニ御座候、恐惶謹言、

七月廿日 高槻幾三郎

八原高次郎

ここに書かれているように、長崎上使に関する順達が下筋へと送られた点は「一応承知」したいのだが、やはり返書がないことで下筋へ伝えたという通達を上筋に対して出来ないとしている。したがって、伝言でも書かれているが、再度の催促が促されている。これに対し、八原は同日の返書にて何度も山口側に対して、確認・催促を行っているが、第二次長州戦争以降、長州藩が他領とのやり取りを行っていないため返書が来ない点を述べている⁸。

一筆令啓達候、然者別紙之通蒲州ヨリ懸合来候二付、防州催促之儀被申達候処、同所江懸合候連モ返簡差越候様者難相成趣二付、其向ヲ以蒲州江返簡草案相調出候様、御沙汰有之候間、此段承知之上、早々可被差出候、右為可申入、如此候、以上、

八月十一日 増田代八

八原高次郎殿

これに対し、同年八月二日には島方代官である増田から以上の書簡が八原に届き、長州藩への催促を行うも返書が届くことは難しかったため、それを踏まえた上で「返簡草案」を作成し送る方針であることが書かれている。そして事態を重く見たのか、同年八月二四日には島方代官元締である松本昌蔵から八原に対して、「当方御考合之儀モ有之候間、過日防州領順達不致向成行之儘、蒲州江御懸合之振如何様ニ相成居候哉、右書類控有之候ハ、御差出有之候様被仰聞候」と書かれた書状が送られ、本件に関わる過去の蒲刈とのやり取りの書簡を全て提出させている¹⁰。その後、同年十一月にも同様に蒲刈より問い合わせがあるも、長州藩側からの返書は同様になく、進展のないまま事態は終息している。

以上のように幕末期には社会状況の変化もあり、異国船に対する警戒が瀬戸内海においても大きくなっているのがわかる。これに対し、実態とは乖離したと考えられる異国船に関する言説が情報として流通するが、確認作業等のバックアップを行っていた。しかし、二度の長州戦争を経た慶応期になると長州藩領区域に対しては「順達」を筆頭として、書簡のやり取り等も全てが滞り、これ以前のような情報流通は完全に途絶していることがわかる。それにより津和地島よりも上筋側からは、これまで通り、「順達」が正常通り流通しているかどうかの確認作業が行われるも、滞ったまま明治維新を迎えてしまうのである。

五 政治的状況と津和地

長州藩領における他領との情報のやり取りの途絶は、これまで瀬戸内海が築き上げてきた情報ネットワークを完全に機能不全に陥らせるものであった。しかし、伊予松山藩自体も、幕末の世情に全く影響を受けていないわけではなかった。

従京都石原量之助到着之处、去ル十三日於二条御城、別紙之通被仰出候旨、申来ル、

我皇国時運之沿革を觀るに王綱級を解て相家權を執り、保平之乱政權武門ニ移てより、我祖宗ニ至り更に寵眷を蒙り二百余年、子孫相受、我王職を奉すと雖政刑当失ふ不少今日之形成に至候も畢竟德之所致不慚懼候、況や当今外国之交際、日に盛なるにより愈朝權ニ途に不出候而、綱紀難相立候間、從來之旧習を改メ政權を朝廷に歸し、広ク天下之公儀蓋し聖断を仰き同心協力共ニ皇国を保護せハ、必ず海外万国ト可並立我国家に儘所不過之、乍去猶見込之儀も有之候ハ、聊忌諱不憚可申聞候、

十月

慶応三年一〇月の記録であるが¹¹、これまで八原家の記録には津和地島周辺や陸地である伊予松山藩とのやり取りなどの公務関係が中心であり、国家的な価値観が登場してくるのは鳴物停止令など二部に関するものが中心であった。また、琉球使節や朝鮮通信使など国家間の外交的関係性を維持する事象も、実際のやり取りは薩摩藩・対馬藩それぞれの役人などにある程度限定されるのが実態であった(玉井二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九)。したがって、このように八原自身がどのように受け取ったのかは判然としないが、尊王思想に関する情報が出てくるのは珍しいといえる。

此度御役御免之儀御内願之御趣意者、当時多事之折柄、重キ御役之儀御才力ニ難被為及候ニ付、松山二藩全力ヲ以御報効被遊度思召、再応御嘆願被遊候処、右御情実御貫通被為嘆之通、御免相成候儀ト被思召候得共、兵制ヲ始、時勢ニ随ヒ万端御一新被遊、藩屏之御志勢被為在度思召候、就而者御家中之面々右御主意厚相弁艱苦ニ相堪、一際義勇相励候様可致旨、被仰出候、

こちらと同じく慶応三年一〇月二七日に島方代官増田代八から八原に送られた書状の一部であるが、ここでは当時の伊予松山藩主松平定昭が大政奉還により幕府老中を辞職したことを受けての通達になる。定昭の辞職に対

し、松山藩としては再び老中の地位に戻つて欲しいとしているが、叶わないため「藩屏之御志勢」として藩士が丸となり対応していく旨が述べられている。これらの政情の変化に対し、松山藩主から二月に次のような文章が藩士に送られている。

將軍職御辭退御聞届ニ相成候得共、御当家ニおゐてハ徳川家御統柄君臣之御情儀不被為替候儀ニ付、当節御危運之折柄、別而御忠勤御励被遊候旨被仰出候間、御家中之面々ニ於ても右趣意之處、篤ト相心得罷在可申事、

ここにあるように大政奉還以降、政情が大きく変化していく中で、松山藩は親藩であるために忠勤に励むべきとの内容である。このような中、伊予松山藩の政治的位置付けも大きく変化していく。翌年の慶応四(一八六八)年一月七日に島方代官増田より八原へ出された書状内には「梅田村御警衛并近傍巡邏可致候、尤怪敷もの見掛候ハ、取押、手余候ハ、打留可申候、委細陸軍奉行並可承合候」¹²と伊予松山藩としての活動も書かれており、鳥羽伏見の戦いにおいて伊予松山藩が梅田周辺の警備に当たっていることが記されている。同年一月四日の増田より八原に出された書状では「上様御儀去ル六日御東下ニ付」、「太守様(中略)十日亥刻過、高浜表江御着船」¹³と書かれており、將軍徳川慶喜が江戸に帰参したため、伊予へと引き上げている。その後、伊予松山藩は鳥羽・伏見の戦いにて幕府側であったために「朝敵」とされ、藩主は蟄居となり、朝廷に対し三万両の献金を命じられるなど、幕末乱期の二連の出来事が逐々、津和地島にいる八原家に伝達されていく。

六 モノとしての茶屋

以上のように幕末期には伊予松山藩自体が政局の流れの中で大きく揺れ動き、それに伴い津和地島の茶屋詰藩士である八原家にもこれまでにない情報ソースが届くようになっていた。しかし、このような大局的な事例に関す

る情報だけが津和地島の大きな関心事として存在していたわけではない。嘉永二年二月二十九日に八原から野瀬義太夫に出された書状には「御高札場・御茶屋并御長屋・常燈所々痛所出来仕候二付、別紙之通、積書ヲ以御修理御願申上候間、早々願之通被仰付被下候」とあるように高札場・茶屋・長屋などが破損があり修理する必要がある旨が了解されている。同年三月二日に八原から野瀬に出された書状には「惣算替御願申上候程之事向年古キ屋根二付、当方大工三而取繕候而ハ不都合御座候間、板屋根師御差向被下候様仕度奉存候」と書かれている破損状況の酷さが理解できる。また島方代官元締である松本昌蔵から八原に対し、慶応三年二月六日に出された書状には「風早島津和地村茶屋并御長屋痛所修理並障子張替共承届候間、右入用之通、当歳納米中勘定不時入用二而可被相渡候、且又品渡之分ハ大賄所小普請所承合取候様可被申聞事」と書かれているように、伊予松山藩が金銭の余裕がない中で、茶屋及び長屋などを修繕する必要がある、その点が藩より許可されている。「不時」とあるように臨時費用であることから、通常の修繕での対応が難しい点がかげえる。慶応四年七月二〇日には島方代官の岡本善兵衛から八原に対し、「京都軍費献金拾五万両被為仰付」、「太守様彼是御心痛被遊」、「御家中ヨリ奇特ヲ以献金願出候趣」と伊予松山藩に命じられた二五万両が重荷となり、茶屋修繕への対応が難しい点を述べている¹⁴。その後、同年七月二〇日には茶屋の「大破」的状况により、「御書院ヲ御長屋へ引継キ」と使用が不可能になり、書院を転用していることがわかる¹⁵。

七 おわりに

以上のように見てきたが、ここで概観を述べる。これまで寛政期において公儀浦触を中心とした情報流通が寛政期に機能不全に陥り、その後、回復をするという歴史的な流れが確認されていたが、幕末期の政情が混乱している中では、それが通用するのかが大きな疑問点として生じる。

確かに嘉永期の記録を見ると、公儀浦触を中心とした情報流通に遅滞は見られない反面、琉球使節通航に関してはこれまで同様に情報流通の支障

が見られる。これは一つには琉球使節という時間的且つ地理的選択が定型化していないにも関わらず、対応すべき事象であることが背景に存在し、それにより情報の遅延・停滞が生じると考えることができる。しかしながら、幕末期になると琉球使節のようにこれまでも見られる情報の遅延だけが現象として起こるわけではない。異国船打払令などの影響により、社会的緊張が高まり、異国船に関する情報が錯綜するようになる。ただし、この点も嘉永期には津和地島より西の「下筋」には情報の確認・是正作業を行うことが可能であった。その後、二度の長州戦争を経て、公儀浦触は長州藩領に対しては完全に不通となってしまう。これは長州藩領が他領との情報のやり取りを完全に遮断していたことに依拠しており、これによって宝暦期に成立したとされる公的な情報ルートは完全に瓦解したのである。そして、伊予松山藩自体も政情の変化の中、大政奉還、鳥羽・伏見の戦い以降、その社会的地位付けが大きく変化し、八原に対しても大局的な情報が藩より送られることになる。その流れの中で、八原が何度も藩に問い合わせをしていたのは破損箇所が多く存在する建築物としての茶屋であった。これはこれまでの公儀浦触を中心とした瀬戸内海情報ネットワークの維持と同様に、その伊予松山藩のターミナル的存在である津和地島の茶屋を維持していくことは非常に重要である。しかしながら、このような尽力は明治維新によって大きく変貌していくことになる。

文献註

- ・東昇「瀬戸内海の本陣と茶屋」(愛媛県歴史文化博物館編『海道をゆく―江戸時代の瀬戸内海―』九九九年)
- ・石丸和雄「八原家御用日記を読んで(上下)」(『伊予史談』二八六・二八七号、一九九二年)
- ・井上淳「瀬戸内海の情報ネットワーク―松山藩津和地御茶屋を中心に―」(『地方史研究』二九二号、二〇〇二年)
- ・伊予史談会編『伊予史談会双書九 松山藩役録』(伊予史談会、一九八九年)
- ・鴨頭俊宏「近世後期における異国船対策と瀬戸内海域のネットワーク―芸予・防予諸島を

- めぐる漂着異国人の長崎移送情報を中心に」(『内海文化研究紀要』三八号、二〇〇一年)
- ・鴨頭俊宏「近世の公用交通路をめぐる情報 瀬戸内海を中心に」(『清文堂』二〇〇四年)
 - ・関西学院大学文化総部地理研究会「地理研瀬戸内調査シリーズ三 津和地」(一九八九年)
 - ・田口由香「幕長戦争の政治的影響 大島口を視点として」(『大島商船高等専門学校紀要』三八号、二〇〇五年)
 - ・田口由香「幕長戦争までの伊予諸藩の動向 松山藩を中心として」(『独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校紀要』三九号、二〇〇六年)
 - ・田口由香「幕長戦争後における長州藩と松山藩の交渉 史料分析を中心として」(『独立行政法人国立高等専門学校機構大島商船高等専門学校紀要』四〇号、二〇〇七年)
 - ・玉井建也「琉球使節通行時に対する「御仕構」態勢について—伊予国津和地島を事例として—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五輯第四分冊、二〇〇六年)
 - ・玉井建也「朝鮮通信使・琉球使節通航と情報・接待・応対—伊予国津和地島を事例として—」(『風俗史学』三六号、二〇〇七年)
 - ・玉井建也「近世琉球使節通航と海域をめぐる情報—伊予国津和地島を事例として—」(『日本歴史』七二七号、二〇〇八年)
 - ・玉井建也「朝鮮通信使への接待と情報収集—伊予国津和地島を中心として—」(『地方史学研究』八号、二〇一二年)
 - ・玉井建也「近世日本における漂着民送還と瀬戸内海」(『共立女子大学文芸学部紀要』六〇号、二〇一四年)
 - ・中島町誌編集委員会「中島町誌」(中島町、一九六八年)
 - ・西村亀太郎「八原家御用日記摘録」(『愛媛の文化』二五号、一九八六年)
 - ・水谷憲「戊辰戦争と「朝敵」藩—敗者の維新史—」(八木書店、二〇一二年)
 - ・水本邦彦「公儀浦触について」(『日本歴史』五〇一号、一九九〇年)
 - ・水本邦彦「近世の国継浦触と海事—九州の場合—」(『洛北史学』四号、二〇〇二年)
 - ・水本邦彦「触書」伝達と近世社会」(松原弘宣・水本邦彦編『日本史における情報伝達』創風社出版、二〇一二年)
 - ・水本邦彦「海辺村からみた幕藩体制」(『同「徳川社会論の視座」』敬文舎、二〇一三年)

註

- 1 「八原家日記 嘉永二年」(九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門所蔵、D-91)
- 2 前掲「八原家日記 嘉永二年」
- 3 「琉球人御用日記」(九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門所蔵、D-2013)
- 4 前掲「八原家日記 嘉永二年」
- 5 「八原家日記 慶応三年」(九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門所蔵、D-93)
- 6 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 7 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 8 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 9 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 10 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 11 前掲「八原家日記 慶応三年」
- 12 「八原家日記 慶応四年」(九州大学附属図書館記録資料館九州文化史資料部門所蔵、D-101)
- 13 前掲「八原家日記 慶応四年」
- 14 前掲「八原家日記 慶応四年」
- 15 前掲「八原家日記 慶応四年」

〔執筆者〕

玉井建也

Tatsuya TAMAI

芸術学部 文芸学科

Department of Literary Art

講師

Lecture